

勝本浦に想いをはせて

① 伊能忠敬2 |

N・S

(前回までのお話・・・およそ二百年前、伊能忠敬は地図作製測量のため勝本浦を訪れている。壱岐に到着して8日後、湯ノ本・本宮・御手洗・タンス・御棚・馬場崎・聖母宮(正村)・鹿ノ下・黒瀬・田ノ中・本浦・お茶屋敷を廻り宿舎に入った。)

翌日は、やはり午前6時には宿舎を出て、亀石・国分方面の測量を実施している。翌々日には出発、午前6時に田ノ浦から船で串山半島にむかい戻り天が原・長瀬鼻まで。

4日目現在の勝中への坂を上り勝中グラウンド付近・平川・新城触(若宮神社)・新城村方面の測量をして宿舎に帰っている。その後3日間ばかり風待ちで勝本浦にとどまり順風につき午前7時頃勝本浦を出船。

対馬厳原へむかっている。

壱岐での宿泊はおよそ半月、勝本での宿は一般の民家だったのだろうか。土肥家とあるが定かではない。いずれも出立は午前6時頃と早い。準備のため早くから起床していたと考えられるが幕府の公人としてのつとめであったのだろうか。

記録によると正村・本浦を歩いている。一行が進んだ道をしのぶと興味はつきない。

山越えでの弁当・竹筒での水も使ったであろう。地元の人々の道案内も大切な仕事だったであろう。こんな事を考えると一行の行動には更に興味津々である。



勝本浦の言葉を考えてみた

6. 食べなあれ、しなあれ

再び、勝本弁のルーツについて考えてみたいと思います。先日、テレビ番組の中で、“食べてね”の和歌山弁として「～食べなあよ」という言葉が出てきました。そこでふと、そういえば・・・と思い出した勝本弁があります。最近では聞く機会がずいぶん少なくなりましたが、人におすすめする時や、行動などを促すとき「～なあれ」と言うときがあります。例えば、「食べなあれ」「しなあれ」「持ちち行きなあれ」など。

「～なあれ」を関西弁で置き換えてみると、「～なはれ」となります。音は、ほぼ同じ。使い方も同じです。鯨組が活躍していた時代、壱岐で最初に捕鯨を始めたのは紀州熊野(現在の和歌山南部)の日高氏であったし、田ノ浦に捕鯨のための納屋場が置かれた後も関西各地との交易・交流は続いていたはずで、その時の記憶が言葉として残った、と思うと一瞬、時空を超えたような心持ちになりました。

! SNSしよいよ!

SNSで勝本浦の情報などを発信しています。「勝本浦まちづくり協議会 事務局」もしくは#壱岐、#勝本、#勝本浦などで検索すると投稿をご覧ください。



Instagram/ インスタグラム
instagram.com/katsumotoura_town_planning/



Facebook/ フェイスブック
facebook.com/katsumotouratownplanning



LINE 公式アカウント
https://lin.ee/wUVrurv



Twitter/ ツイッター
twitter.com/gyYZRB5CfDokUZ2



発行 勝本浦まちづくり協議会 事務局

〒811-5501 壱岐市勝本町勝本浦 211-3 勝本地区公民館内

TEL : 090-9576-7285 email : katsumoto020301@gmail.com

担当 : 坂本 栄子